3. 普及啓発

3-1. 概要

行動計画に示す普及啓発の取組として、県民の外来種問題への意識向上や、ペットや園芸植物等の適正飼養・栽培を促すため、県民や関係事業者等に対し、普及啓発のための取組を実施した。

・県民全般	外来種に関する企画展の開催
・学校等	普及啓発資料の作成・配布
・ペットショップ・園芸ショップ等	普及啓発資料の作成・配布
・農林水産事業者	普及啓発資料の配布
・意図的外来種（外来植物の適正利用方針）	普及啓発資料の配布

上記取組を実施するために必要なパネル、展示物等を作成した。

以下、行動計画での記載内容と今年度の取組を整理した。

3-2. 県民全般

【行動計画での記載内容】（p3）

（1）対策基盤の整備

1）普及啓発

① 県民全般

外来種はペット等としても多く利用されており、私たちの生活と密接に関わっています。このため、県民一人ひとりが外来種問題を認識し、外来種被害防止三原則（「入れない」「捨てない」「広げない」）を守ることが大切です。

現在実施している捨て犬・捨て猫ゼロを目指した「一生うちの子プロジェクト」によりペットの適正飼養を促すとともに、行政施設等においてパンフレットの配布やポスターの掲示等を行い、県民全体の外来種問題への意識向上を図ります。また、県内で開催されるイベント（県民環境フェア等）にブースの出展を行い、パンフレットの配布やパネルの展示を行います。

【今年度の取組内容】

（i）開催方法及び開催場所

県民全般への普及啓発の取組は、県民環境フェアでのブース出展を想定していた。しかし、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、その開催は不確定な状況であったため、県内各地でパネル展「沖縄の外来種問題を考えよう！」を開催した。開催場所は、生物や外来種問題への興味・関心の有無にかかわらず、様々な方たちが観覧可能な場所として、図書館等を中心とした。また、昨年度の取組では沖縄島の 1 箇所（沖縄県立博物館・美術館でのオンライン併用セミナー及び併設パネル展）での開催であったため、今年度は沖縄島に加え、宮古島、石垣島でも実施した。なお、令和 4 年 1 月 31 日に開催予定であった県民環境フェアは中止となった。

表 3-2.1　県民全般を対象とした普及啓発活動

開催場所		開催期間
沖縄島	沖縄県立図書館	令和 3 年 10 月 13 日～10 月 25 日
	道の駅 ゆいゆい国頭*1	令和 3 年 12 月 1 日～令和 4 年 3 月 10 日
	沖縄県立博物館・美術館*2	令和 4 年 2 月 22 日～3 月 13 日
宮古島	宮古島市立図書館	令和 3 年 11 月 4 日～11 月 17 日
	宮古島市役所	令和 4 年 2 月 28 日～3 月 11 日
石垣島	石垣市立図書館	令和 3 年 12 月 2 日～12 月 16 日
	ユーグレナ石垣港離島ターミナル	令和 3 年 12 月 2 日～12 月 16 日
	国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター	令和 3 年 12 月 2 日～12 月 16 日

*1 国立沖縄自然史博物館誘致企画展の開催場所の一角にて開催した。

*2 沖縄県立博物館・美術館と共同主催のもと、「おきなわの生物多様性を守ろうー希少種保全と外来種対策ー」として開催した。

沖縄県立図書館
［展示スペース］

道の駅 ゆいゆい国頭
［常設展示室］

沖縄県立博物館・美術館
［エントランスホール］

宮古島市立図書館
［ブラウジングコーナー］

宮古島市役所
［展示スペース］

石垣市立図書館
［展示室］

ユーグレナ石垣港離島ターミナル
［待合ロビー］

国際サンゴ礁研究･モニタリングセンター　［玄関ロビー］

（ii）展示内容

昨年度の取組のものと概ね同じ内容になるが、外来種リストが更新されたこと（令和３年３月）を受け、一部内容を修正し更新した。また、会場や展示場所の広さに合わせ、展示物を適宜変更した。

表 3-2.2　県民全般を対象とした普及啓発の展示内容

解説パネル	沖縄県の外来種対策やリスト掲載種を紹介したパネル
生物実物大パネル	リストで優先的に対策する種と選定した外来種の実物大写真
外来種紅型	リストで優先的に対策する種と選定した外来種を紅型で表現したもの
ヒアリ観察顕微鏡	関心の高い実物のヒアリ（標本）を観察する顕微鏡
資料配布	外来種対策指針（A4 冊子）や普及啓発グッズ（シール・ステッカー）の配布

解説パネル

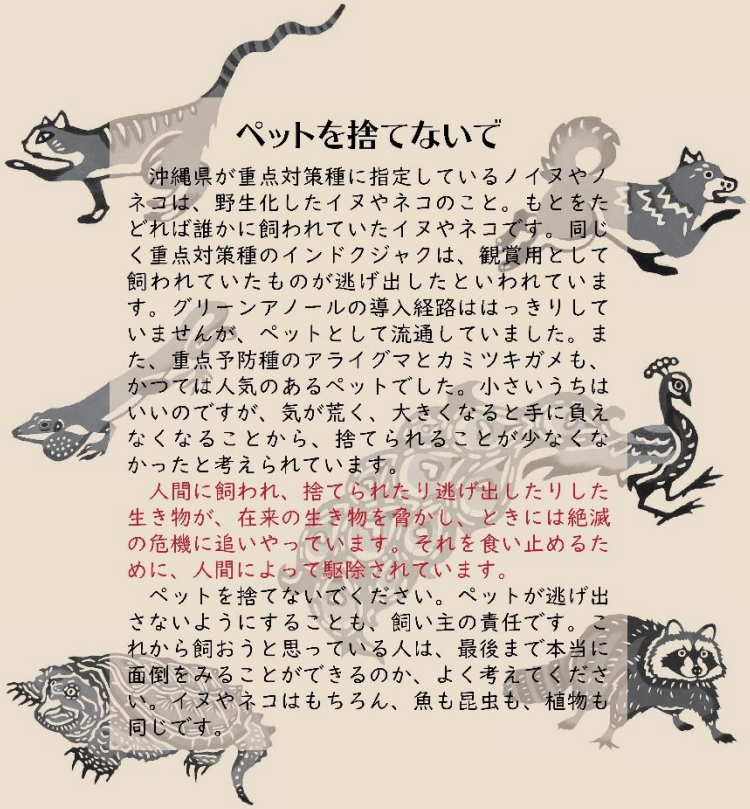
生物実物大パネル

外来種紅型

ヒアリ観察顕微鏡

資料配布

【沖縄県外来種対策指針 概要】A4 中綴じ 8 頁　（▭ ：令和元年(2019 年)7 月発行版からの更新箇所）



ペットを捨てないで

沖縄県が重点対策種に指定しているノイヌやノネコは、野生化したイヌやネコのこと。もとをたどれば誰かに飼われていたイヌやネコです。同じく重点対策種のインドクジャクは、観賞用として飼われていたものが逃げ出したといわれています。グリーンアノールの導入経路ははっきりしていませんが、ペットとして流通していました。また、重点予防種のアライグマとカミツキガメも、かつては人気のあるペットでした。小さいうちはいいのですが、気が荒く、大きくなると手に負えなくなることから、捨てられることが少なくなかったと考えられています。

人間に飼われ、捨てられたり逃げ出したりした生き物が、在来の生き物を脅かし、ときには絶滅の危機に追いやっています。それを食い止めるために、人間によって駆除されています。

ペットを捨てないでください。ペットが逃げ出さないようにすることも、飼い主の責任です。これから飼おうと思っている人は、最後まで本当に面倒をみることができるのか、よく考えてください。イヌやネコはもちろん、魚も昆虫も、植物も同じです。

沖縄県外来種対策指針等について
沖縄県外来種対策指針や沖縄県対策外来種リスト、
沖縄県外来種対策行動計画等の詳細は下記URLをご参照ください。
https://www.pref.okinawa.jp/site/kankyo/shizen/hogo/gairaisyutaisakushishin.html

沖縄県外来種対策指針 概要
令和3年(2021年)9月発行
沖縄県環境部自然保護課　〒900-8570 沖縄県那覇市泉崎1-2-2 行政棟4階　TEL:098-866-2243
(株)一般財団法人沖縄県環境科学センター

沖縄県

概要

外来種から沖縄の自然と文化を守るために

沖縄県を含む琉球列島は、多くの島々から成り、日本のなかでも生物多様性の高い地域です。海で隔てられたことによって、島の生物は独自の進化を遂げ、ヤンバルクイナやイリオモテヤマネコなど数多くの固有種が誕生しました。また、沖縄県の植物は、面積当たりの種数が日本本土の45倍ともいわれています。

一方、沖縄県のような島しょの生態系は、外来種の侵入などの環境の変化に対して脆弱です。すでに多くの外来種が沖縄県に侵入・定着し、その一部は生態系に大きな影響を及ぼしています。

外来種とは、人間活動によって本来の生息地以外に持ち込まれた生き物のことです。外来種は他の生き物を食べたり、住む場所を奪ったりすることで、侵入した地域の生態系にさまざまな影響を及ぼします。また、毒をもった外来種が人を刺すなどの健康被害や、畑を荒らすなど農林水産業への影響もあります。

こうした外来種の対策を総合的・効果的に推進する方針を示し、人の生命・身体、農林水産業への被害を防止するとともに、沖縄県の生物多様性を保全するため、平成30年6月に「沖縄県外来種対策指針」が策定されました。

令和2年3月には沖縄県外来種対策指針において定めた将来像を実現するため、具体的な取組を示した「沖縄県外来種対策行動計画」が策定されました。

やんばる地域の固有種ヤンバルクイナ
マングースの影響で生息数が減少した

沖縄県外来種対策指針

指針の目的

沖縄県の生物多様性を保全していくためには、外来種による生態系や人の生命・身体、農林水産業への影響を最小限に抑えることが必要です。この指針は、沖縄県の特性と現状を踏まえた総合的な対策を実施するための方向性を示すことを目的としています。

目指す将来像

沖縄県への侵略的外来種の侵入が予防され、すでに定着している侵略的外来種については対策が実施され、外来種による生態系等への影響が最小限に抑えられ、人の生命・身体、農林水産業への被害が防止されるとともに、生物多様性が保全されている。

実施する施策

- 対策を行う外来種のリストを作成し、優先順位を決定します
- 行動計画を策定します
- 重点対策種に対して、防除を中心とした対策を実施します
- 重点予防種の定着を防止するための対策を実施します
- 産業管理外来種の適切な管理を促すための啓発を行います
- 外来種対策の普及活動と認知度調査を実施します
- 対策を行うための体制を構築します

指針が対象とする外来種

この指針では、国外からの外来種だけでなく、国内や県内からの外来種も対策の対象とします。

1 国外からの外来種

国外から持ち込まれた生物は、生態系に大きな影響を及ぼすことがあります。

1910年に沖縄島に導入されたマングース
在来種を捕食して生態系に影響を与える

2 国内(県外)からの外来種

国内の生物であっても、県外から持ち込まれた生物は、生態系に影響を及ぼすことがあります。

九州などから導入されたニホンイノシシ
ウミガメの卵などを捕食し生態系に影響を与える

3 国内(県内の別の島)からの外来種

沖縄県では島ごとに独自の生態系が成立しており、たとえ県内であっても、別の島から持ち込まれた生物は、生態系に影響を及ぼすことがあります。

八重山地域に生息するヤエヤマセマルハコガメ
宮古島や沖縄島で移入(別体が見つかっている
リュウキュウヤマガメとの交雑が確認されている

対策の方針

1 対策基盤の整備

外来種対策を効果的に推進していくためには、以下のような対策の基盤が不可欠です。

① 県民の外来種問題への理解
② 外来種に関する情報
③ 外来種対策に関わる人材

これらの基盤を整備する取組を進めます。

住民参加型のツルヒヨドリ駆除作業
県民の外来種への理解を深めるため、地域住民も参加したツルヒヨドリの駆除を行った

2 侵入の防止(予防)

外来種対策で最も重要な取組は、外来種を本県に侵入・定着させない予防の取組です。沖縄県に侵入する外来種には、「人間が意図的に導入する外来種」と「物資に混入するなど意図せず導入される外来種」があります。それぞれに応じた予防対策を実施することで、侵略的な外来種の侵入を防止します。

ヒアリの侵入監視モニタリング
ヒアリ侵入を監視するため、港湾周辺でトラップによるモニタリングを実施している

3 防除の推進

すでに県内に侵入・定着している外来種のうち、生物多様性への影響が大きいと考えられる種については、捕獲等による防除を実施します。外来種の防除では、基本的には外来種の個体数をゼロにする根絶を目指しますが、技術的・経済的に根絶が困難と予想される場合は、分布の拡大を制御するなどの被害低減を目指した取組を実施します。

探索犬によるマングースの探索
やんばる地域からのマングースの排除を目指して捕獲による防除事業を実施している

沖縄県では、県内への定着状況、生態系等への影響を考慮して、沖縄県対策外来種リストを策定しました。令和３年３月現在、特に対策が必要なものとして、重点対策種１５種、重点予防種６種、産業管理外来種３種が指定されています。

重点対策種

影響が大きく、重点的に対策を実施する外来種

ノイヌ
野生化したイヌ。もともとはペットや猟犬、もしくはその子孫。ヤンバルクイナなどの希少種を含む在来動物に大きな影響をもえていると考えられており、人を襲うこともある。

アメリカハマグルマ
緑化用に導入された植物。繁殖力が強く、県内各地で繁茂しており、他の植物の生育環境を奪っている。根や茎から再生するので、駆除する場合には根ごと抜き取り、抜き取った植物体を放置せず確実に処分する必要がある。

フイリマングース
一般に「マングース」と呼ばれることが多い。ハブ退治等のために持ち込まれたが、実際はハブより簡単に捕まえられるヤンバルクイナなどを襲い、絶滅の危機に追いやっている。県内ではいくつかの島に持ち込まれたが、現在でも確認されているのは沖縄島のみ。沖縄島北部では駆除が進んでおり、野生動物も回復し始めている。

オオヒキガエル
8～15cmの大きなカエル。動きは鈍いが強い毒があり、本種を食べたイヌが死んでしまうこともある。そのため、本種を食べるヘビや鳥などの在来動物への影響が心配されている。また昆虫をはじめとするさまざまな小型動物を捕食する。石垣島や大東諸島で野生化しており、西表島でも目撃例がある。西表島に定着した場合、イリオモテヤマネコ等への影響が懸念される。特定外来生物。

タイワンハブ
1970年代～1990年代に、ヘビのショーや酒肴として大量に輸入されていた。現在は特定外来生物に指定されており、原則輸入は禁止されている。ハブの仲間なので毒があり、人が咬まれることもある。名護市周辺で増えており、民家周辺ではハブよりタイワンハブが捕獲されることの方が多い。ハブより小型で、模様が異なる。在来動物の捕食や在来ヘビとの競合、在来ハブとの交雑も懸念されている。

ノネコ
野生化したネコ。もともとは捨て猫したか捨てられたペット、もしくはその子孫。やんばるでは、ヤンバルクイナなどの希少な動物を襲うこともある。西表島では、イリオモテヤマネコへのネコエイズの感染も心配されている。

ニホンイノシシ（イノブタを含む）
本州～九州原産のニホンイノシシやイノブタ（イノシシとブタの雑種）が、県内各地に持ち込まれ野生化しており、在来のリュウキュウイノシシとの交雑が懸念されている。リュウキュウイノシシが生息していない慶良間諸島では農業被害が問題になっており、在来の両生類などへの影響が懸念されている。

コウライキジ
中国東南部・朝鮮半島原産。首に白い部分があるのが特徴。本州～九州では、在来のキジとの交雑が問題になっている。もともとキジのいない沖縄県では農業被害が問題になっているほか、在来の鳥との競合も懸念されている。

ニホンイタチ
ネズミ駆除等の目的で宮古島や慶間味島などに持ち込まれたが、希少な爬虫類などを食べてしまうことが問題になっている。もともとは本州～九州に生息する日本固有種。本来の生息地では、外来のチョウセンイタチによって減少している。

ツルヒヨドリ
英語で「Mile-a-minute-weed」（1分で1マイル広がる雑草）の異名を持つ植物。つる性で成長が非常に早く、他の植物に覆いかぶさるように繁茂する。日本では、1984年に沖縄県うるま市で初めて確認され、分布が広がっている。駆除する場合には、根ごと抜き取り、放置せず確実に処分する必要がある。特定外来生物。

インドクジャク
広げた尾羽が美しく、丈夫で飼いやすいため、観賞用として飼育されることが多い。石垣島や小浜島、黒島など八重山諸島で野生化しており、飼育個体が逃げ出したと考えられている。西表島でも確認されたことがある。在来の昆虫や爬虫類、小鳥類への影響が懸念されている。

サイカブト
「タイワンカブト」とも呼ばれる。外来種として世界各地に定着しており、ヤシ類の害虫として知られている。沖縄でも県内各地に侵入しているが、特に大東諸島においては、ダイトウオオコウモリなどの希少生物の生息にとって重要なヤシ科のダイトウビロウに影響を与えている。

グリーンアノール
きれいな緑色のトカゲだが、状況によって色が変わり、茶色い場合もある。オスはデュラップと呼ばれるピンク色ののど袋をもち、求愛や威嚇のために扇状に広げる。デュラップは首設にたたまれており見えない。沖縄県では、1989年に沖縄島で初めて確認され、現在では北部以外にも定着している。小笠原諸島では数々の固有昆虫を絶滅の危機に追いやっているといわれており、沖縄でも同様の被害が生じることが心配されている。特定外来生物。

ハヤトゲフシアリ
2021年3月、新たに重点対策種に指定された。2017年、日本で初めて名古屋港で見つかって以降、国内の港湾地域数か所で確認されており、沖縄県内でも2020年2月に確認された。働きアリは2.5～4mmで、中胸部が細くくびれている。アルゼンチンアリと同程度の生活様式が推測されている。赤はない。特定外来生物に2020年11月に指定された。

タイワンスジオ
無毒のヘビだが、日本産のどのヘビよりも大型になり、普通は全長2mを越え、最大2.7mにも達する。沖縄島中部に生息しており、分布は拡大している。このまま定着すると、ヤンバルクイナなどの希少種を含むさまざまな在来動物に影響を与えることが懸念されている。特定外来生物。

セアカゴケグモ

オーストラリア原産の毒グモ。咬まれると強い痛みが伴い、嘔吐や動悸、発汗などを伴うこともあるが、攻撃性は高くはない。1995年に大阪府で日本で初めて確認され、現在では広く分布する。沖縄県では1996年に米軍施設内のコンテナで確認されているが、定着は確認されていない。特定外来生物。

ヒアリ

2017年、日本で初めて兵庫県で確認された。その後も各地で見つかっているが、定着は確認されていない。働きアリは2.5～6mmで、ひとつの巣にさまざまな大きさの働きアリがいる。大きいもので高さ40cmほどのドーム型のアリ塚を形成する。巣を刺激すると集団で襲いかかり、おしりの毒針で刺されると激痛とともに赤くはれあがる。ごくまれだが、アナフィラキシーショックを起こし、命に関わることもある。攻撃性が高く、小型のほ乳類などを捕食することもある。特定外来生物。

アカカミアリ

ヒアリと同様に毒針を持つが、ヒアリより毒性は弱い。働きアリは3.5～5.5mmで、大型の個体の中には頭部の巨大化した兵アリがいる。国内では小笠原諸島の硫黄島にのみ定着し、他のアリ類を駆逐して侵略的種になっている。特定外来生物。

重点予防種

現在、沖縄県には定着していないが、
定着した場合影響が大きいと予想されるため、
重点的に予防対策を実施する外来種

アルゼンチンアリ

働きアリは2～3mm。南アメリカ原産だが、関東～中国地方にかけて広く侵入している。ひとつの巣に多数の女王アリが同居し、大集団で移動しながら暮らす。他種のアリの巣を見つけると、巣の中に入り込んで卵や幼虫を食べ全滅させる。毒はない。特定外来生物。

アライグマ

動物園で展示されたり、ペットとして日本に持ち込まれた。かわいらしい見た目に反して気性が荒く、飼い切れずに捨てられたものも多かったと考えられている。在来の希少な動物を食べたり、農作物を荒らしたりして問題になっている。特定外来生物。

カミツキガメ

攻撃的で、成長すると40cmほどになる。ペットとして流通していたが、成長して持て余し、捨てられたと思われる個体が各地で見つかっている。千葉県の印旛沼では定着していると考えられており、沖縄県でも目撃例がある。咬む力が強く、大型個体に咬まれると人怪我につながる。特定外来生物。

セイヨウミツバチ

全国的に養蜂に広く利用されている。オオスズメバチなどの天敵の存在により、野生化した事例はあまりないが、沖縄県ではこうした天敵がおらず、希少鳥類であるノグチゲラの巣穴や樹洞での営巣が懸念されている。また、送粉能力が高いため、在来のハナバチ類との競合や、在来植物への影響も心配されている。

クロマルハナバチ

オレンジ色のおしりが特徴。セイヨウオオマルハナバチが特定外来生物に指定されたことにより、代替種としてトマト等の受粉に利用されるようになった。本州～九州の在来種だが、沖縄県にはもともと生息しておらず、セイヨウオオマルハナバチと同様、外に逃さない管理が求められる。

産業管理外来種

産業等において重要だが、
生態系への影響が懸念されるため、
適切な管理が必要な外来種

セイヨウオオマルハナバチ

目いおしりが特徴。ハウス栽培のトマトなどの受粉に利用されるが、北海道では逃げ出したハチが野生化してしまい、在来のマルハナバチが減少したとされる。花首に穴をあけて蜜を吸う「盗蜜」により、在来植物に影響を与えているともいわれている。2006年に特定外来生物に指定され、使用には届出とハウスの適切な管理が必要だが、全国的に管理の不備が指摘されている。

特定外来生物って？

特定外来生物は、外来生物法により、生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれのあるものとして指定され、以下のような規制の対象となります。

- 飼育、栽培、保管及び運搬が原則禁止
- 輸入が原則禁止
- 野外へ放つ、植える及びまくことが原則禁止
- 譲渡し、引渡し、販売が禁止

【普及啓発グッズ】シール・ステッカー

（ ▭ ：令和元年(2019 年)7 月作成版からの追加箇所）

（iii）実施結果（資料配布数とアンケート回収数）

8 会場でパネル展を実施し、指針（概要版：A4 冊子、8 ページ）を 1,103 部、外来種リストで優先的に対策する種とした生物のシール及びステッカーをそれぞれ 1,780 部､1,774 部を配布した。ここでの配布部数は持ち帰られた数を指すが、冊子体である指針よりも気軽に手に取りやすいと考えられるシール及びステッカーの配布部数が多い結果となった。

また、各会場でアンケートを実施し、計 232 名から回答を得た。外来種という言葉については、84%の方が意味を知っていたものの、11%は言葉は聞いたことがあるが意味は知らなかった、という回答であった。沖縄県が外来種対策を実施していることについては、70%の方が知っていたものの、26%は知らなかった。また、このパネル展を通じて、90%の方から理解が深まったと回答を得た。印象に残った内容では、「ヒアリ観察顕微鏡」が 50%と最も高く、次いで「外来種紅型（45%）」、「生物実物大パネル（42%）」、「解説パネル（30%）」の順であった。感じたこととして、「もっと学びたい」が最も高く 56%、次いで「動物を捨てない、逃がさない（55%）」、「植物を敷地外に植えない（41%）」、「イベントに参加したい（33%）」、「その他（25%）」の順であった。「その他」への記載内容として、ヒアリが初めて見られて参考になった、沖縄の在来種についても知りたくなった、印象的なイラストが目に留まりパンフレットなどを読む気になった、地域の図書館など気軽に行ける場所にも展示をしてほしい、小学生向けの対応も行ってほしい、子どもたちに伝えるための資料があると良い、などがあった。

表 3-2.3　県民全般を対象とした普及啓発資料の配布数

会場（開催日数：休館日等は除く）	配布部数			アンケート回収数
	外来種対策指針	シール*1	ステッカー*1	
沖縄県立図書館（12 日）	165	200	200	46
道の駅 ゆいゆい国頭（100 日）	191	400	400	71
沖縄県立博物館・美術館（18 日）	334	400	400	38
宮古島市立図書館（12 日）	57	109	124	31
宮古島市役所（10 日）	44	82	71	8
石垣市立図書館（13 日）	61	139	129	16
ユーグレナ石垣港離島ターミナル（15 日）	151	200	200	19
国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター（11 日）	100*2	250*2	250*2	3
計	1,103	1,780	1,774	232

*1 シール・ステッカーの設置数は開催期間 1 週間につき 100 部を目途とした。

*2 展示期間終了後に国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターにおいて設置及び使用予定の数を含む。

アンケート結果（全体）

○回答数	232	

Ｑ１：今日、会場を訪れる前、外来種という言葉を知っていましたか		
・外来種という言葉の意味を知っていた	194	84%
・外来種という言葉は聞いたことはあったが、意味は知らなかった	26	11%
・今日、初めて外来種という言葉を知った	7	3%
・わからない	3	1%
	（未回答 2）	
Ｑ２：沖縄県が外来種対策を実施していることを何かひとつでも知っていましたか		
・知っていた	161	70%
・知らなかった	59	26%
・わからない	9	4%
	（未回答 3）	
Ｑ３：この展示を通して外来種についての理解が深まりましたか		
・理解が深まった	206	90%
・理解は深まらなかった	15	7%
・わからない	8	3%
	（未回答 3）	
Ｑ４：この展示のどれがもっとも印象に残りましたか（当てはまるものすべて）		
・ヒアリ観察顕微鏡	88	50%※
・外来種紅型	80	45%※
・生物実物大パネル	74	42%※
・解説パネル	53	30%※
・その他	14	8%※
・印象に残ったものはなかった	2	1%※
・わからない	3	2%※

（展示物をすべて展示した会場の集計結果）

※回答者 177 名に対する割合

Ｑ５：この展示を通して感じたことを教えてください		
・飼育している動物を捨てない、逃がさないようにしようと思った	128	55%※
・栽培している植物を敷地の外に植えないようにしようと思った	94	41%※
・外来種についてもっと学びたいと思った	131	56%※
・外来種対策のイベントに参加してみたいと思った	76	33%※
・特に感じたことはなかった	4	2%※
・その他	58	25%※
・わからない	4	2%※

※回答者 232 名に対する割合

「その他」への記載内容（一部）

・ヒアリが初めて見られて参考になった。
・沖縄の在来種についても知りたくなった。
・アメリカハマグルマは見たことがある気がする、外来種とは知らなかった。
・紅型に惹かれたのが正直なところだが、そこから外来種についての内容にも興味を持った。
・印象的なイラストが目にとまり、掲示物やパンフレットなどを読む気になった。
・詳しい人向けに最新の情報や文献も展示してほしい。
・地域の図書館など、気軽に行ける場所にも展示をしてほしい。
・子供たちに伝えるための資料があると説明しやすい。
・小学生向けの対応も行ってほしい。
・外来種がいることは分かったが、個人がどうアクションすべきなのかが分からなかった。

アンケート結果（各会場）

①沖縄県立図書館、②道の駅 ゆいゆい国頭（外来種紅型あり）、③道の駅 ゆいゆい国頭（外来種紅型なし）、④沖縄県立博物館・美術館、⑤宮古島市立図書館、⑥宮古島市役所、⑦石垣市立図書館
⑧ユーグレナ石垣港離島ターミナル、⑨国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター

回答数	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	計
	46	49	22	38	31	8	16	19	3	232

Q1：今日、会場を訪れる前、外来種という言葉を知っていましたか	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	計
外来種という言葉の意味を知っていた	41 (89%)	41 (84%)	17 (77%)	33 (92%)	23 (74%)	8 (100%)	14 (88%)	14 (74%)	3 (100%)	194 (84%)
外来種という言葉は聞いたことはあったが、意味は知らなかった	5 (11%)	6 (12%)	5 (23%)	1 (3%)	6 (19%)	0 (0%)	1 (6%)	2 (11%)	0 (0%)	26 (11%)
今日、初めて外来種という言葉を知った	0 (0%)	2 (4%)	0 (0%)	2 (6%)	2 (6%)	0 (0%)	1 (6%)	0 (0%)	0 (0%)	7 (3%)
わからない	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (16%)	0 (0%)	3 (1%)
計	46 (100%)	49 (100%)	22 (100%)	36 (100%)	31 (100%)	8 (100%)	16 (100%)	19 (100%)	3 (100%)	230 (100%)

Q2：沖縄県が外来種対策を実施していることを何かひとつでも知っていましたか	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	計
知っていた	33 (73%)	38 (78%)	17 (77%)	24 (67%)	15 (48%)	7 (88%)	13 (81%)	11 (58%)	3 (100%)	161 (70%)
知らなかった	11 (24%)	11 (22%)	5 (23%)	9 (25%)	14 (45%)	1 (13%)	3 (19%)	5 (26%)	0 (0%)	59 (26%)
わからない	1 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (8%)	2 (6%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (16%)	0 (0%)	9 (4%)
計	45 (100%)	49 (100%)	22 (100%)	36 (100%)	31 (100%)	8 (100%)	16 (100%)	19 (100%)	3 (100%)	229 (100%)

Q3：この展示を通して外来種についての理解が深まりましたか	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	計
理解が深まった	45 (98%)	42 (88%)	21 (95%)	32 (89%)	26 (84%)	8 (100%)	15 (94%)	14 (74%)	3 (100%)	206 (90%)
理解は深まらなかった	1 (2%)	5 (10%)	0 (0%)	2 (6%)	3 (10%)	0 (0%)	1 (6%)	3 (16%)	0 (0%)	15 (7%)
わからない	0 (0%)	1 (2%)	1 (5%)	2 (6%)	2 (6%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (11%)	0 (0%)	8 (3%)
計	46 (100%)	48 (100%)	22 (100%)	36 (100%)	31 (100%)	8 (100%)	16 (100%)	19 (100%)	3 (100%)	229 (100%)

Q4：この展示のどれがもっとも印象に残りましたか（当てはまるものすべて）	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	計
ヒアリ観察顕微鏡	30 (65%)	28 (57%)	11 (50%)	11 (31%)	13 (42%)	3 (38%)	6 (38%)	– –	3 (100%)	88 (50%)
外来種紅型	25 (54%)	17 (35%)	– –	13 (37%)	16 (52%)	– –	9 (56%)	– –	– –	80 (45%)
生物実物大パネル	16 (35%)	22 (45%)	11 (50%)	14 (40%)	14 (45%)	7 (88%)	8 (50%)	7 (37%)	– –	74 (42%)
解説パネル	19 (41%)	13 (27%)	6 (27%)	5 (14%)	12 (39%)	2 (25%)	4 (25%)	11 (58%)	– –	53 (30%)
その他	2 (4%)	3 (6%)	1 (5%)	7 (20%)	1 (3%)	0 (0%)	1 (6%)	4 (21%)	0 (0%)	14 (8%)
印象に残ったものはなかった	0 (0%)	1 (2%)	1 (5%)	1 (3%)	0 (0%)	1 (13%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (1%)
わからない	1 (2%)	2 (4%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (5%)	0 (0%)	3 (2%)
計	93	86	30	51	56	13	28	23	3	314

Q5：この展示を通して感じたことを教えてください	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	計
飼育している動物を捨てない、逃がさないようにしようと思った	26 (57%)	31 (63%)	14 (64%)	17 (47%)	15 (48%)	5 (63%)	11 (69%)	8 (42%)	1 (33%)	128 (55%)
栽培している植物を敷地の外に植えないようにしようと思った	17 (37%)	21 (43%)	9 (41%)	15 (42%)	13 (42%)	4 (50%)	7 (44%)	7 (37%)	1 (33%)	94 (41%)
外来種についてもっと学びたいと思った	28 (61%)	31 (63%)	16 (73%)	20 (56%)	16 (52%)	6 (75%)	3 (19%)	9 (47%)	2 (67%)	131 (56%)
外来種対策のイベントに参加してみたいと思った	16 (35%)	13 (27%)	11 (50%)	11 (31%)	10 (32%)	3 (38%)	6 (38%)	4 (21%)	2 (67%)	76 (33%)
特に感じたことはなかった	1 (2%)	0 (0%)	1 (5%)	0 (0%)	2 (6%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	4 (2%)
その他	14 (30%)	4 (8%)	3 (14%)	12 (33%)	5 (16%)	3 (38%)	6 (38%)	10 (53%)	1 (33%)	58 (25%)
わからない	0 (0%)	1 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (6%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (5%)	0 (0%)	4 (2%)
計	102	101	54	75	63	21	33	39	7	495

・道の駅 ゆいゆい国頭は外来種紅型を展示した期間と展示しなかった期間を分けて集計した（②、③）。
・Q1～Q3について、合計が回答数と合わないものは未回答があったことを示す。
・Q4の「–」はその展示物を展示していないことを示す。
・Q4及びQ5の割合はそれぞれの回答者数に対する割合を示す。
・Q4の合計（塗りつぶし部）は展示物をすべて展示した会場（①、②、④、⑤、⑦）の集計結果を示す。

（iv）今後の展開

今年度はコロナ禍でも実施可能な取組として、パネル展を各地で開催した。また、展示物を複数揃えることで、同期間に複数会場での開催も可能な体制を整えながら実施した。

開催場所とした図書館は、様々な方たちへ幅広く周知を図る場として有効であり、資料の補充等についても協力が得られやすいなどのメリットがあると考えられる。また、市町村立図書館はより地域住民に近い場であるため、市町村担当課と連携し（例えば、住民に知ってもらいたいことや行政が取り組んでいる対策などの情報収集など）、地域に合わせた展示内容にすることで、より関心を持ってもらいやすい場として活用できると考えられる。

一方で、詳しい人向けの最新の情報なども展示してほしい、見つけて駆除したいのでツルヒヨドリの特徴（葉の形など）を知りたい、などのアンケート回答もあり、現在の展示内容に加え、深堀りした内容の追加を検討する必要性も示唆された。そのため、外来種リストで示した優先的に対策する種の特徴や詳細な解説などを示した内容のパネル等の作成を検討する。また、博物館等で開催することで、学芸員等の方々と連携及び協力を図る。

以上を踏まえ、次年度は図書館を基軸として幅広く周知を図るとともに、博物館等で深掘りした内容の周知を行うことで、県民への普及啓発を推進する。

表 3-2.4　今後の県民全般を対象とした普及啓発活動

図書館	博物館等
・幅広く周知 ・市町村担当課と連携 　→地域に合わせた展示内容	・深掘りした内容の周知 ・学芸員等と連携 　→詳細な情報の提供
【開催場所候補】 　市町村立図書館 37 館 　（市立 23 館、町立 7 館、村立 7 館）	【開催場所候補】 　博物館等 20 施設程度 　（自然史系）